

40年足らずで終わった 隋の中国再統一



中華世界を再統一し、 中央集権体制を強化

581年、華北の北周の外戚であった楊堅は、皇帝を譲られ、文帝となつて隋を建てた。589年、隋は南朝の陳を滅ぼし、晋の滅亡以来273年ぶりに中国統一を果たした。

文帝は、北朝の支配体制にならない、均田制、府兵制(徴兵制)を取り入れるとともに、律令(律は刑法、令は行政法)を定めた。さらに、租庸調の税制(租は穀物、庸は労役、調は絹・綿など)を導入することで皇帝の農民支配を強め、中央集権体制を強化した。

また、官吏登用法として、その後長らく中華王朝で引き継がれることになる科挙(隋では選挙とよんだ)を創設した。科挙は、門閥貴族を生む温床になつてきたそれまでの九品中正法を改め、学科試験によつて官吏を採用するもので、皇帝による中央集権体制を強固にするねらいがあつた。この制度は、清朝末期の1905年に廃止されるまで、実に1300年余りにわたつて続けられることとなる。

民衆への過重な負担が反乱を招き、40年たらずで滅亡

文帝の次子である広は、兄を失脚させて皇太子となり、父を殺害して帝位につ

いたといわれる。これが煬帝である。煬帝は、文帝以来の大運河を完成させ、これにより、江南の物資の華北への流通が容易になり、南北の統合が進んだ。

しかし、この一大土木工事では100万人を越す民衆が動員され、過重な負担を強いられたばかりでなく、煬帝はこの運河をしばしば遊びに使い、離宮へ行く際には、金銀で飾り立てた巨大な龍の船など、数千隻もの船を農民に曳かせた。また、万里の長城の改修・王宮や離宮の造営などにも民衆が動員された。

一方、このころには、大和朝廷による国家統一をほぼ成し遂げた日本が、煬帝のもとへ遣隋使を派遣して、対等な国交を求めている。また、文帝は北方の遊牧民である突厥を討ち、東西に分裂させることに成功したが、煬帝は高句麗(P.54参照)が突厥と結ぶことを恐れ、3度にわたる高句麗遠征を敢行した。しかし、これが失敗に終わると、皇帝の権威は失墜し、各地で農民の反乱が起こる。煬帝による人民の酷使に、飢饉や水害が加つたことによるものだった。200もの集団が蜂起し、国内最大の穀物倉庫がある洛陽を占領。煬帝は数十万の軍を送り鎮圧を図つたが、反乱軍の勢いはもはや止められなかつた。ついに煬帝は江都の離宮で臣下によつて殺され、隋帝国はわずか2代40年足らずで滅亡した。

長い分裂時代に終止符を打ち、中華帝国を再建した隋は、人民の酷使などに起因する反乱により、あえなく滅び去る。

煬帝時代の隋

北朝の隋は南朝の陳を滅ぼし、晋以来、中国を再統一した。



高句麗遠征
3次に及ぶ高句麗への大規模な出兵は、乙支文徳(おつしぶんとく)に率いられた高句麗軍の激しい抵抗などにより、失敗に終わる。

大運河
文帝とその子煬帝が造営した運河。総延長約2000km。江南の経済圏と華北の政治中枢を結び、物資流通の大動脈となった。

遣隋使
600年ころから614年までの間に、推古(すいこ)朝の日本から小野妹子(おののいもこ)をはじめとした使節が、数度にわたつて送られた。

日本が初めて向き合った中華帝国・隋
遣隋使により、日本は中華帝国に対し、初めて対等の立場での外交を求めた。聖徳太子の「日出る国の天子、書を日没する国の天子に致す…」という国書はその意思を表明している。この国書を読んだ煬帝は激怒したといわれるが、日本征討の命を下すことはなかつた。

